

ガウディの壁

庄 籠 道 子

子どもはお客さんじゃいやだよ

私の勤めている幼稚園は、PTA活動や幼稚園行事への協力など、保護者が大活躍する幼稚園です。毎年、親子で何か作物を作って、収穫して収穫祭で会食をする活動が続いてきました。三年前は大豆、一昨年はオクラを作りました。

お母さんたちが耕した畑に作られたくほみに、お母さんに付き添われてきた子どもたちは、オクラの

種を入れて、言われるままに土をかぶせました。水は子どもたち自身でもやっていたけれど、草取りは全部お母さんたちでした。「ほら、芽が出たよ」「ほら、花が咲いたよ。見てごらん」実がなったときには言われたようにはさみで切って収穫もしました。

赤いオクラも、丸いオクラも、なすびみたいな形のオクラも見ました。ゆがいてもらって試食もしました。堅くなったオクラでスタンプ遊びもしました。

今まで食べられなかったオクラが、食べられるよ

うになった子どももいました。でも「少しいいとこ取りではないか?」「お膳立てされて、流れに乗せられている感じがしないか?」「子どもたちが身体を使つてかかわつて、もつといろいろハブニングがあつたりしてもいいのではないか?」などと先生たちから意見が出ました。

そこで、昨年度の初めに私たちは「保護者がお膳立てして『子どもはお客さん』は止めましょう。子どもが手や身体を使つて動く、親はそのお手伝いをしましょう」と、保護者に呼びかけました。

イモと土とつんち

昨年の作物は、サツマイモに決まりました。

まずは畑。年中組横の畑は、日当たりが今一つです。畑の引越しをすることになりました。そう、まずは子どもたちの手で。

もうすぐ苗差しが行われる五月のある晴れた日、

私は黙つて砂場倉庫に行き、子ども用のシャベルと土を運ぶ一輪車を出してきました。一輪車も子ども用です。素知らぬ顔で年中組横の畑に行き、土をすくつて一輪車に入れて運びます。

「なに、やってるの?」

「ん? 道路工事」

「ぼくもやる」

「どうぞ。砂場倉庫に、シャベルも一輪車もあつたよ」
Aが始めると、すぐに「ぼくも」「わたしも」と次々にやってきます。一輪車は二台しかありません。しかたない、替わつてあげよう。私はバケツに土を入れて運びます。そのバケツを三輪車の荷台に乗せて運ぶ人ができました。

「へー、おもしろいこと考えたねー」

三輪車の荷台も危なっかしいし、一輪車の運転は下手だし……。目的地に着くまでのあちらこちらに土がひっくり返っています。それもすくつて運ばな

くてはいけません。これは、確かに大人がやったほうが楽かもしれません。

だけど、疲れてやめる人もいれば、新たに始める人もいて、また復活する人もいて……。少しずつ年中組横の土は、雲梯横の畑に移動します。

Bが、じょうろに水をくんできました。移動した土に掛けてくれます。

「あ、家、作ることにしようよ。ここ、お風呂」
Bの一声で、あつという間に、ここは家の建設現場。

「大きなお風呂、作ろう」
「ぼく、トイレ作る」

シャベルでどんどん穴を掘ります。バケツに水を含んできたCが、掘った穴にバケツの水をザバーと入れました。水がたまります。Dがバケツの水をまたザバー。バシヤと跳ねが上がり、横の園舎の壁に、跳ねた茶色い泥がドベツとくつつきました。畑

の土は砂場の砂と違うのですね。跳ねた泥の固まりは壁からなかなか落ちてきません。これはおもしろい。子どもたちは次々とバケツの水を建築中の風呂にぶちまけます。

そのうちにだんごを作って壁に投げつける人ができました。次々と投げつけます。もつと高く、もつと大きい。そう思うらしく、子どもたちは壁から離れて身体を反らせて、腕を伸ばして投げつけます。誰も教えていないのに、どうして自然とこんなことができるのかなあ。

Eが泥の付いた手で雲梯を触ったら、棒が茶色くなりました。

「ペンキ屋さん」

雲梯の棒がどんどん茶色に塗られていきます。と思ったら、じょうろを持ってきた子が水を掛けて「せんとく屋さん」
なるほどね。

お迎えに来た一人のお母さんが言いました。

「わあガウデイの壁[※]ごっこはしばらく続きました」

ガウデイの壁ごっこはしばらく続きました。砂場の砂とは違う畑の土の感触を、ほら、写真のように全身で味わう子どもいました。



▲泥に溶け込むように遊ぶ子どもたち

その後、ガウデイの畑に芋の苗を差ししました。すくすく苗は伸び、葉が茂り、気がついたら大量のイモムシが発見されました。子どもたちは大喜びでイモムシを集めました。中には直径1.5cm、長さ10cmにもなる大イモムシもいて歓声があがりました。

そうそう、家を持って帰って育て、さなぎを手のひらに乗せていたら羽化が始まってしまった人もいたそうです。背中が割れて羽が出てきて。でも蝶ではありません。蛾です。何とも言えない体験をしたようです。きっと一生忘れないでしょうね。

その後、芋のつるを切りました。芋のつるはお母さんたちが綱引きができるようにと束ねてくれました。何回も引っ張ると、つるは少しずつ切れたりばらばらになったりしました。それで、そのばらばらのつるで綱取りをしたところ、とても盛り上がりました。芋づるリースを作ったり、芋のつるをゆがい

て食べたりしました。

ほとんどが一般的な黄色い芋の苗で、いくつか紫芋やニンジンみたいな芋の苗も植えたのですが、芋掘りをしたみたら、なぜか黄色い芋はほとんど出てこず、紫芋がたくさん出てきました。不思議です。

近くの公園に落ち葉を集めに行き、落ち葉を燃やして焼きイモを作りました。「けむい」の「くさい」と大騒ぎをして落ち葉をたき、アルミホイルに包んで焼いた焼き芋はとってもおいしかったです。

焼き芋も終わりになったころ、一人の男の子が

「ほら、犬のうんち」

と、手のひらを差し出しました。本当に本物のうんちかと思って、ぎょつとしていると、その子の担任が来てこっそり教えてくれました。

「灰と畑の土で作ったんですよ」

「本物じゃなかったんだ。よかった。でも、本当に本物みたい。よくできてる」

たくさんの本物に触れて

私の勤めている幼稚園の園庭は、市内中心部にありながら、大きなクスノキが三本あります。園庭のどこを掘ってもいいことにしているので、でこぼこしています。雨上がりには水たまりができます。小石が転がっています。石があつて危ないと言う保護者に「今、幼稚園で石と遊ばないで、いっどこで石とつきあいますか?」と説明すると理解してくださいました。

子どもたちには、土・水・砂・石・風・雨・花・葉・樹・煙・臭い・虫……。たくさんの本物に手足も心も使って身体全体で触れて育つてほしいです。

(佐賀大学文化教育学部附属幼稚園)

※アントニ・ガウディ スペイン(カタルーニャ)の建築家
(二八五二―一九二〇)。今も建築中のサグラダ・ファミリアやゲエル公園など独創的な建築群で有名